

コロンビア

穀物の流通機構

橋谷 則子

(在ボゴタ海外派遣員)

コーヒー、切花の輸出向け産品を除いても、コロンビアの農業は自国消費という意味で生産活動におけるウエイトは大きい。1970～85年間の国内総生産に占める割合は22.3%、成長率における貢献度は15.6%であった。しかし短期的にみるとここ数年の農業生産の伸びは総じて停滞している。その主な理由はマクロ経済政策における、輸出向け商品作物を除くいわゆる伝統的作物生産に対する関心の薄さにある。それは生産構造における問題のみならず、流通過程における問題でもある。以下、コロンビアの食物消費の基盤である穀物の例をとってこれらの問題点を考察してみよう。

穀物の生産状況

全国土地栽培面積に占める割合からすると主要作物は米、とうもろこし、フリホール豆、小麦などである。コロンビアではその変化に富む地勢条件から作物の生産地分布も複雑である。たとえば米の場合、主要生産県は、トリーマ、ウイラ、カルダス等の中部地域、リャノス、コスタ(太平洋岸地域)の三地域とバージェ県に分散している。他方、気候条件にたいする適応力の強いとうもろこしの場合は全国各県で生産される。

農業用地分配については、伝統的に小規模(5ha以下)、中規模(5～50ha)農地が支配的であった。この国がミニフンディスタの国といわれる所以である。

むろん生産様式による違いはある。例えば米の場合、最近のかんがい化の進展によって資本集約度が高まり50ha以上の農園の占める割合が拡大しつつある。その一方、労働集約的な干式栽培では平均4haの規模である。全国的にみれば、前者はバージェ県に集中し、その他の主要米生産地は後者の傾向が一般的である。

流通過程

穀物の流通に関しては、IDEMA (Instituto de Mercadeo Agrícola) の存在を抜きには語れない。

これは農牧省下の公的機関でその主な機能は、基礎的農産物の売買、収納、輸出入の管理による、国内市場の統制にある。売買は穀類を中心とする9品目に対して支持価格を設定し(収穫前)、生産者からの直接買い上げによって行なわれる。支持価格は全国一律であるが、大消費地の近くでは民間の卸売市場価格を下回るため、大きな意味をもたない。もともとIDEMAの設立の目的が、辺境地域の食糧確保政策にあるためである。特に首都ボゴタに関しては民間卸売場CORABASTOSの独占力が圧倒的に強く、IDEMAの影響力は極めて弱い。

CORABASTOSは総敷地面積およそ82ha、収容量10万人、トラック1万台をほこる中南米有数の大食糧市場である。全国各地から農産物のみならず、食肉、鶏卵、海産物まで集散・売買される。主力は野菜・果物の青果物と馬鈴薯・穀物である。各卸売市場は作物別に分割・設置されており、穀物、青果類については、それぞれ13、14市場をかかえている。

筆者は先月同市場を訪れてみた。印象もまじえてCORABASTOSの活動状況を簡単に述べてみたい。

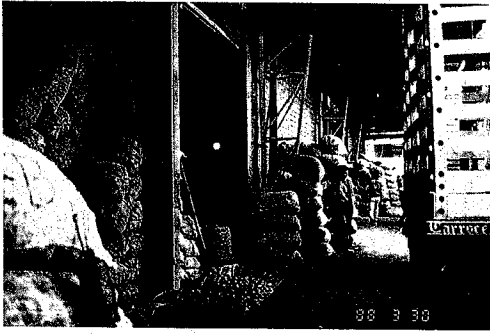
CORABASTOSとは

CORABASTOSの朝は早い。4時すぎ、まだ寝静まったボゴタの街を市南西のはずれシウダー・ケネディ(Ciudad Kennedy 大衆居住区)のそのまた先まで出かけるのは少々覚悟が要った。

既に4時半の開門を待って、馬鈴薯を満載した大型トラックがひしめいている。ボゴタの明け方の冷え込みは厳しい。

4時半。開門と同時にそれまでティント(コーヒー)やアグワルディエンテ(焼酎)で寒さをしのいでいた人ばかりが一斉に動き出した。

取引はまず馬鈴薯からはじまる。なぜひもちのする馬鈴薯が最初なのかというと、ボゴタ周辺の



馬鈴薯の倉庫

寒冷地での生産量が多いこと、コロンビア全国的に消費量のウェイトが高いこと、のほかは習慣以外のなものでもないそうである。

取引は5トン積みトラックごと仲介業者と卸売商との間で成立する。競り売りではない。売値が決まると、その足でCORABASTOS内の倉庫または卸売市場にうつされる。その一部は小売商と取引され、小売市場で売買される。すなわち、CORABASTOSの構成員は倉庫主、市場権をもつ卸売商（あわせて約2500人）、小売商（数未確定）そして多数の仲介業者からなっている。生産地からボゴタ-CORABASTOSに着くまで、一商品あたり平均5人の仲介を経るというから、この流通過程に携わる人の数は計りしれない。

馬鈴薯の売買が一段落する5時半ころ、今度は青果市場の取引がはじまる。鮮度が命の商品であるから、すべての行程が素早くとり運ばれる。7時前にはすべての市場に積み荷が降ろされ、既に小売が始まっている。各市場、足の踏み場もなく、喧噪と荷を担ぐ人々にもみくちゃにされながら構内を一周すると既に9時、これから穀物の取引が始まる。そして10時半にはすべての卸売活動は終了し、一般小売商（主にレストラン、スーパーマーケット等）との取引が続く。

CORABASTOSでは入場口でトラックの積み荷（作物、総量）と出発生産地の確認によって商品をチェックする。ボゴタに到着する作物の出所を知るには、唯一この統計に頼るしかない。

ボゴタへの機能集中と問題点

米の例で示したように、ボゴタで売買・消費される穀類の大半は首都の位置するクンディナマル



青物市場（小売商）の一角

カ県以外の隣県及び遠隔地から運ばれてくる。これは各作物の同県内（ボゴタを含む）の消費量と生産量とのバランスの推計によってみると、より明らかである。米は93%以上、フリホール豆、小麦は各々85%以上が他県からの供給によってまかなわれていることになる。とうもろこしの場合には24%と比較的低いが、これは生産地における自家消費率が高い（飼料用分を含む）ことと、アレーパ（とうもろこしを種にした蒸しパン）加工用の原料として除かれた分が大きいためである。

消費性向の変化についてみれば、ボゴタの場合伝統的主食であるとうもろこし、米からパンへの転換が著しいことも小麦の流通・加工機構の集中の一因となっている。しかし、コロンビア全体については、例えばコスタ等依然として米の消費が中心となっており、地域的には伝統的な食生活が根強い。

穀物に限ってみればボゴタで消費される約30%がCORABASTOSで取引されている。この流通過程における集中と市場占有はIDEMAの介入力と生産者同盟の組織力の脆弱さにある。その結果、消費者価格における卸売商および仲介業者（輸送コストを含む）の-marginが高くなり生産者の取り分が相対的に低くなるだけでなく、都市消費者は高い小売価格に苦しむことになる。IDEMAは市場価格より安価な支持価格で売買するが、その多くは学校、病院等の公的施設を対象としており、一般消費者への恩恵は少ない。

すなわち、首都ボゴタにおける流通機能と消費の集中は生産者への還元についてのみならず、都市大衆の生活水準向上に対しても大きなネックになっている。